タイトル：2024 年度 教育セミナー（第 20 回）
日時：2024 年 9 月 19 日（木）～22 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「対象の選択と研究の客観性：イスラーム研究の事例から考える」
後藤絵美（東京外国語大学 AA 研）

研究の成立過程にはいくつかの段階があり、研究者はそれぞれの段階で、意識的な、あるいは無意識のうちに、多くの選択を行う。そして、その選択過程には、研究に偏向性を与えかねない「罠」もみられるというのが本講義の主旨である。

本講義では、研究が成立する段階として、①主題の設定と資料の収集、②先行研究の調査と資料批判、③主題に関する「適切な」資料の選択・読解・解釈という三つを設定し、それぞれにおける「罠」として、目に入りやすい主題や手に入りやすい資料があること（①）、一部の先行研究や資料への無批判な姿勢があること（②）、主題と資料の関係において何が「適切か」の検討が不十分な場合があること（③）という三点を挙げ、イスラーム研究の事例を通じて具体的に示した。

第一の「目に入りやすい主題や手に入りやすい資料があること」は、先行研究や資料の分量的な偏りと言い換えることもできる。たとえば、現代のイスラーム研究では「イスラーム主義者」や「原理主義者」と呼ばれる勢力に関する研究や資料が圧倒的に多い。現実的勢力としてもこれらの割合や影響力が大きいという点で、注目する必要や理由は大いにある。その一方で、研究者がもっぱらかれらの声を取り上げ、紹介することで、その影響力をいっそう増大させることも考えられる。他方、ほとんど注目されてこなかった声も存在する。後者を検討する必要性が前者と比べて劣るのかという点は、考えてみる必要があるだろう。

第二の「一部の先行研究や資料への無批判な姿勢があること」について、講義ではハディースを取り上げた。ハディースはイスラームの預言者であり使徒であるムハンマドの言葉や行為の記録とみなされるものである。もっとも信憑性が高いハディースの集成として、ブハーリーとムスリムの『真正集（サヒーフ）』が知られるが、講義では、ジェンダー的な公正をめぐって「真正」と認められたハディースへの疑義の声があがっていることを紹介し、「第二の聖典」と呼ばれるものへの無批判な姿勢を再考する可能性について指摘した。

第三の「主題と資料の関係において何が「適切か」の検討が不十分な場合があること」は、クルアーンを引用する際にどの翻訳を用いるかという問いを出発点として検討した。その

際、井筒俊彦訳『コーラン』と三田了一・日本ムスリム協会訳『日亜対訳・注解 聖クルアーン』を事例として、それぞれ誰がどのような意図で、何を根拠に翻訳したものかを把握することが重要であると示した。そして井筒が『コーランを読む』（1983 年）の中で、クルアーンは元来、神による預言者ムハンマドへの語りかけであったが、それが記述され、書物となったことで、時代的にも空間的にも隔たった者が、そこにある言葉を、自らの視点（「地平」）から、理解したり、解釈したりするようになったと述べている一文を紹介した。そうした性質やその理解の構造を把握した上で、研究の中でクルアーンを扱う必要があるということになろう。

私自身、かつて自分は研究において「客観的に」対象を捉え、記述していると信じていたが、イスラームやジェンダーについて知識を得る中で、そうではないということに気がついた。本講義で取り上げたのは、そう考えるに至った理由のごく一部であるが、受講生の皆さんが、今後研究を進める上で何かの参考になればと願っている。